Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-08-13

能力人間学としての骨相学ー近代教育言説における「能力」のエピステモロジーー

平野, 亮

(Degree)
博士（教育学）

(Date of Degree)
2012-03-25

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲5561

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005561

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（別紙様式３）

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　　平野　亮
専　　攻　　教育・学習 専攻
指導教官氏名　　白水　浩信

論文題目（外国語の場合は，その和訳を併記すること。）

能力人間学としての骨相学
―近代教育言説における「能力」のエピステモロジー―

論文要旨

本論文は，「能力」概念の視角から骨相学（phrenology）に関する史料を読み解き，能力心理学としての骨相学の理論と教育について分析・考察したものである。換言すれば，それは「能力」と「教育」という関心から，「能力」概念の歴史的な“認識論的布置”を描き出す試みの一つであり，歴史的素材として取り上げられたのが，これまで教育学研究において等閑視されてきた骨相学である。具体的には，骨相学を能力心理学として再定位するべく，骨相学理論の創唱者ドイツ人医師F・J・ガル（1758-1828）並びにガル学説を「骨相学」という名称で喧伝した弟子J・G・シュプルツハイム（1776-1832）による著作を読み解き，骨相学の能力・人間・教育に関する認識・思考・言説を，西洋思想史における能力論の歴史に位置づけつつ，検討した。このような思索と作業は，教育学研究における「骨相学」の歴史的素材としての魅力を明らかにするばかりでなく，「能力」概念に依存しがちな現代教育に関する省察の契機を与えるものである。

骨相学の先行研究は西洋を中心に蓄積されてきたが，こと教育史的アプローチのものとなると僅少と言ってよい。D・デ・ジュスティーノ（*Conquest of mind*, 1975）やS・トムリンソン（*Head masters*, 2005）がまとまった研究を発表しているほか，日本の小松佳代子がイギリス教育史と心理学史の2領域における骨相学の有する歴史的意味を考察したのが，数少ないその代表例である。本論文は，それらの成果に学びながら，先行研究では採用されなかった「能力」と「教育」の観点から，骨相学言説の読み直しを行った。そして，19世紀の「脳の生理学」＝「心の哲学」の能力論と，それが企図した「心」と「脳」と「能力」の教育論を明らかにし，教育思想史に能力心理学としての骨相学を位置づけることを目指した。

第一章では，特に日本ではあまり知られていない骨相学について，その理論的オリジナルであるガルの学説や西洋における骨相学の反響の歴史を紹介した。また，それらの検討から，本論の基礎となる骨相学の人間観や思想的特徴について指摘した。

19世紀西洋で大流行した骨相学は，動物の性向・感情・知性などを脳器官の機能と見た，ガル学説に由来する。精神病院や刑務所，学校などで人間観察を繰り返したガルは，内面的な気質と外面的な頭部の凸凹との相関性を見出し，これを脳を構成する各器官に局在する能力とその発達（大小）として理解する「脳の生理学」を提唱した。有限個の器官の各機能の組み合わせが全ての心的活動の源泉であり，各器官の異なる発達によって生じる脳表面の隆起が頭蓋を介して頭部の形状に表われ，結果，外形からその人の気質・道徳性・才能・知性などを可触的・可視的に診断することができる。いわゆる脳科学に基づく個別的な人間読解術（観相学）だったガル学説（骨相学）は，同時代の幅広い領域の人々の興味を引きつけ，多数の著名人をも巻き込む是非交々の活発な議論を惹起した。

この議論を見ていくと，ガル学説を推した人々が，「観察」という実証的方法に基づいて人間本性を可視化した科学性と，個別的な実践性を讃えていたのに対し，反対派は，一つはその生理学的・解剖学的側面の不正確を指摘する科学的反発を，もう一つは生得的で唯物論的な人間観に対する哲学的反発を示していたことが了解される。ガルの人間観は，彼がその学説を公にした最初の論文及び講演録からも明らかな通り，「自然」を原理とする一種の決定論的人間観であり，その「自然」が物質である脳によって説明されたことが，科学とは別次元での反感を買ったのである。内面的先天性とその表徴たる外面の理論が，ガルの弟子たちによる骨相学においては「心」の議論とされ，「能力」概念で思考されることになる。

第二章では，骨相学の3つの前史，観相学・生理学（能力心理学）・解剖学（脳機能局在論）それぞれの歴史を素描し，能力心理学としての骨相学が位置づくべき思想・学説史を再構成した。この3領域は，シュプルツハイム自身が人間学（anthropology）としての骨相学を構成する要素として挙げたていたものだが，これまでの骨相学研究では具体的に顧みられてこなかった。しかし，19世紀の骨相学の伝統性と新奇性は，プラトンーアリストテレスをはじめとした古代ギリシャを起点とする西洋思想の長い歴史を概観することで初めて明らかとなるのであり，またそのことによって，今日の「能力」言説までを見通した「能力」概念に関する認識論の歴史に，骨相学とその教育を位置づけることが可能となるのである。

人間をその「能力」から解き明かそうとする研究は，主に魂（psychē/ anima）論として考察されてきた古代以来の西洋思想の伝統であり，中世から近代においては脳器官（主として脳室）との関連において，「理性的動物」としての人間の知覚や知性，情念などの特に精神的能力が議論された。18世紀のカントの「人間学」が，能力論と観相学から構想されていたように，骨相学もまた，人間の自然の表徴を読み解く観相学，経験と当為によって規定される人間の本性的・精神的能力を論じる能力心理学，及びその解剖学的器官としての脳の機能局在論から人間を解明する人間学であり，物質的な脳の生理と発達でこれを解説した近代の能力心理学だったのである。

以上の考察は，第三章の作業によって確認される。第三章では，骨相学を能力心理学として再定位するべく，その「能力」論的用語や体系について分析した。骨相学を能力心理学と指摘する先行研究は，心理学者のW・ジェームズのものを始め少なくないが，これを史料に即して検討したものは殆どない。だが，骨相学の教育思想史研究にとってこれが看過できないテーマであることは，シュプルツハイムの大著『ガル博士とシュプルツハイム博士の観相学的体系（*The physiognomical system of Drs. Gall and Spurzheim*）』（1815）などの検討からも明らかとなる。

「ファカルティ（faculty）」概念によって整理・体系化されたガル学説，即ち能力心理学としての「骨相学」を唱えたのは，ガルと離反したシュプルツハイムであった。シュプルツハイムは「哲学化」と称して，脳器官の各機能を自然に従って「性情（affection）」と「知性（intellect）」，更に下位区分「性向（propensity）」「情操（sentiment）」「知覚（perception）」「思慮（reflection）」

に分類し，「科学化」と称して，この階層を当時自然誌（博物学や植物学など）で用いられた分類系に適用し，一つ一つの能力名を統一性のある用語に改めた。特徴的なのは，脳機能としての性向・感情から知性までを区別無く「ファカルティ」と称したことで，これにより骨相学の体系化，即ち能力心理学としての骨相学は実質的に完成したのである。

この際，能力概念形成史を語る上でロックの知性論にまで遡ってみる必要がある。あらゆる観念の生得性を否定したロックだが，その哲学の前提には人間の自然としての心の形式能力（ファカルティズ）があった。ロック哲学のこの側面は殆ど注目されてこなかったが，これを媒介にすることで骨相学の能力論は古代からの能力心理学の系譜に位置付き，「ファカルティ」という能力語彙の観念史を描出することが可能となるのである。ロックを経由して，改めてシュプルツハイムの能力心理学を見てみれば，科学的生理学と哲学的能力心理学の合流という骨相学の近代的・学的特徴がより鮮明となる。それまでの能力心理学的体系がなしえなかった「特定能力」を数え上げ，性向から理性までを一つの概念「ファカルティ」で標示した骨相学は，最も体系化された能力心理学の近代における“成熟”だったということが，以上の分析から浮き彫りになった。

脳や頭蓋骨ではない人面付き頭部に器官の区画を設けた骨相マップを採用するなど，専門的な近寄りがたさを払拭して骨相学を大衆化したシュプルツハイムの仕掛けにおいて，本研究が注目したのは，「各能力は，神の被造物（人間）の自然として本性的に善である」という彼の能力観である。この「能力」の認識論あるいはレトリックが，骨相学の教育論を可能にし，またその逆も然りとする。ガルは「哲学化」を自然からの逸脱と非難したが，ガルを非難することで骨相学を際立たせようとしたシュプルツハイムにとって，教育こそ最重要テーマの一つだったという事実が明らかになる。

第四章では，第三章の考察を踏まえ，能力心理学としての骨相学が如何なる教育理論及び実践を具体的に企図し展開したのかを検証した。骨相学の教育とは，とりもなおさず“能力の教育”であった。そもそも骨相学の能力とは脳器官の生理であり，それゆえその教育は心身をともに重視し，衛生や環境，子供の本性などの大切さを強調するものであった。これらの一切の前提は人間の自然，即ち各能力の生得性（innateness）だったが，故に教育の及ばぬ決定論と即断するのは早計だ。全ての能力は教育可能性（educability）を持つとシュプルツハイムは明言した。そして，人間の性格や行動の善悪は，本質的に善いものである能力の使途――正しい効用（use）と誤用（abuse）――において理解された。即ち，骨相学の教育論を論理的に成立させていたのは，伝統的な能力心理学には見られなかった，露骨に明示された「能力」に関するこれらの哲学的信念と概念装置だったのである。

骨相学者クームの経営した私立学校の報告書『ウィリアムズ・セキュラー・スクール第一年次報告書（*First annual report of the Williams Secular School*）』（1850）に記述された骨相学的教育の実践事例の検討は，それを裏付ける。労働者階級の子弟を対象としたこの世俗学校では，一般的な科目群に骨相学が並び，一方で教科以外の学校活動の随所に骨相学理論に基づいた教育的配慮が凝らされていた。そして，その教育は，例えば機械的で受動的な学習や体罰は“子供の能力の自然”という次元において批判され，非行や反省は“道徳能力とその発達・使途”の次元において思惟され，語られるものだった。報告書の検討により一層明瞭になったのは，骨相学の「能力」論が教育的思惟を可能にする語彙を与え，教育実践の計画と観察を規定していたという事実である。「教育の役割は，能力を活性化し，働かせ，導き，有用な用途を決めてやり，誤用を防ぐことである」というシュプルツハイムによる「教育」の定義も，その一例証と言える。

「能力」が教育的思惟を可能にする情況は，今日一層顕著である。「新しい能力」が次々に案出されては，教育，即ちその内容・方法・対象（つまり人間）を規定・画定しようと試み，ここに脳科学の進展なども絡んでくる。19世紀の骨相学は，人間を「能力」で読み替える能力心理学の伝統的思考を，特に心的能力において徹底して推し進め，「脳の生理学」と「心の哲学」に基づく“能力人間”像を現出させた。この人間像は，骨相学が人間の自然を読み解くために構成した「能力」概念によって，逆に導出されたものである。骨相学の教育とは，いわば「能力の束」としての人間の生理学的・哲学的教育だったのである。「有用な科学」としての骨相学は今日消散したが，本研究が新たに浮かび上がらせた能力心理学としての骨相学とその能力教育論は，構想される「能力」の認識論史の一部を明らかにするとともに，近代教育言説の一つの祖型を暴き出しているのである。

［課程博士用］

論文審査の結果の要旨

氏　名	平野　亮		
論文題目	能力人間学としての骨相学 — 近代教育言説における「能力」のエピステモロジー —		
判　定	合　格・不合格		
審査委員	区　分	職　名	氏　名
	主　査	准教授	白水　浩信
	副　査	教　授	船寄　俊雄
	副　査	教　授	稲垣　成哲
	副　査	教　授	木下　孝司
	副　査	東京藝術大学 准教授	小松　佳代子

要　旨

本論文は、西洋における「能力」概念の認識論的布置（エピステモロジー）を歴史的に画定しようとしたものであり、特に19世紀に勃興した「骨相学(phrenology)」を能力概念に依存する近代教育言説の一つの祖型として剔抉し、教育思想史研究におけるその意義を再検討する独創的研究の成果である。

骨相学と呼ばれる固有の人間学が19世紀西洋を席巻した。骨相学は、当時35＋αに分割されうると考えられた脳器官に人間のすべての能力を割り振ることができるとする学理をもとに、これら脳の凹凸に対応した頭蓋の形状を計測することで個人の能力を知悉することが可能であり、教育をはじめとした多くの分野に応用可能と期待されていた学説である。今日では否定されてしまった骨相学も、当時は画期的科学であるとして数多くの支持者を獲得していたのであり、学説そのものが否定されてもなお、骨相学は能力に関する思惟の型、とりわけ教育言説の型を隠然と規定してやまない。本論文は、そのことを周到な先行研究の精査と浩瀚な史料の読解によって明らかにする。その手法もまた卓越しており、能力概念を徹底して括弧にくくり、「能力(faculty)」という言葉の自己運動の軌跡として教育思想史を語り直そうとするものである。近年の西洋教育思想史研究の動向に照らして、瞠目すべき達成であると評価しうる。

第一章では、骨相学の創始者F・J・ガル(1758-1828)の生涯、学説が紹介される。骨相学の主要なアイデアはガルに負っているとはいえ、彼自身は「骨相学」という呼称を嫌って、頭蓋の観察に基づく「脳の生理学」であることに拘った。さらに本章では、当時、骨相学を信奉した多彩な人々の記録から、その影響の大きさを叙述している。

第二章では、骨相学の前史として、観相学、能力心理学、脳機能局在論の歴史が繙かれる。古代、中世、近世に著された能力関連文献を原典にまで立ち返り、該博な知識を駆使して展開される本章は、骨相学がこれら伝統的三学説の系譜を汲み、「能力」概念において結合させる、心の哲学＝脳の生理学であったことを実証する導入部として位置づけられる。先行研究ではほとんど顧みられることのなかったこの論点の検証は、本論文の成果のひとつとして特記すべきである。

第三章では、心の哲学と脳の生理学を架橋した能力心理学としての骨相学が、いかなる画期性を有するかについて歴史的な検討がなされている。シュプルツハイム(1776-1832)は、人間の精神活動全体を「能力(faculty)」の一語でもって捉え、個々の諸能力に対して汎用性の高い命名法の体系を確立し、骨相マップによる視覚化という仕掛けをも駆使しながら、骨相学の大衆化に大きく貢献した。彼の「能力」に関する語彙と体系は、それ自体、教育への応用にとって重要な意味を有してくる。そもそも骨相学に対しては、当時からその決定論的性格に批判があり、教育の不可能性を主張しているかのようにも受けとめられた。このような批判に対し、シュプルツハイムの中性化された命名法の真意は明白で、すべての「能力」は本質的に善だという主張に直接結びつくものである。ただ「能力」にはその正しい使用と誤用があり、教育によって「能力」を有用な使途へと導くことは可能だと喧伝されたのである。脳に局在する「能力」の束として捉えられた人間は、種々の「能力」全般にわたって教育可能な存在となる。このような骨相学の唱えた「能力」概念は、ジョン・ロック『人間知性論』において生得的ではないと見做された観念でさえ、生得的な「能力」としてその範疇に収める、大幅な概念の適用範囲の拡張を見出すことができると結論づけている。

第四章では、当時、イギリス最大の骨相学者、G・クーム(1788-1858)によって開校されたウィリアムズ・セキュラー・スクールの年次報告書をもとに分析が示される。同校では、一般的な科目群と並んで骨相学が教授され、同時に学校活動の随所に骨相学的知見を踏まえた教育活動が営まれていた。とりわけ同校の骨相学的教育の成果を評定する試験の様子が詳しく紹介され、「能力」の頭蓋における位置の確認にはじまり、その使用と誤用について詳細な質疑応答がなされていたことが明らかとなった。骨相学の「能力」論が教育的思惟を可能にする語彙を与え、教育実践の計画と観察を規定していたという事実が浮き彫りになっている。

以上のように本論文は、19世紀骨相学文献の詳細な読解分析により、「能力」という概念が見せる人間像の生成史、及び近代教育言説の歴史的性格規定に関して重要な価値ある知見の集積と認められる。よって学位申請者、平野亮は、博士（教育学）の学位を得る資格があると判定する。

（審査付学術論文）

1. 平野亮「F・J・ガルの学説に見る骨相学の人間観—骨相学の教育史研究のための基礎的研究」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第4巻第1号、2010年9月、37-46頁。
2. 平野亮「骨相学的能力訓練の一場面—ウィリアムズ・セキュラー・スクールにおける教育実践をてがかりに」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第5巻第2号、2012年3月（刊行予定）。

レフリー付きの論文の発表について，記載すること。